

いのちを愛でることのできる人に成長してゆくであ  
ろうとひらめく。そして手のぬくもりを与え、感じ  
あい、抱きしめる時をいかに創り出してゆくかが今  
問われている課題であると。

堅い道の隙間から苔が、草花が風とたわむれお陽

さまと語りあっている。ほんの少し足を止め、抱  
きしめる時を探してほくほくしたいものである。  
「あたらしい」ことに出会える今を大切に、日々転  
機できる自分探しをしてゆきたいと願っている。

(助産師)

## 子どもが生きるクラスに向けて

林 明日香

新しい年度となる時期は、前年度の総括と新年度  
の準備で仕事が殺到するのであるが、なんだか春う

らかな気候に助けられ、心機一転、新たな気持ち  
にさせられる。日常の当たり前になっっていることを

改めて見直し、よりよい保育が実現するよう園全体が話し合いを重ねる時期でもある。『新しい』というテーマに寄せて、ともすれば決まっている枠組みのようにある「クラス編成」について平成十六年度の保育実践を通して考えてみる。

### 一人ひとりにとつてのクラス編成

新年度を迎えるにあたって、今年の年長児のクラス編成について話し合う場がもたれた。年中では一クラス二十五人の二クラス、担任はR先生と私であつた。その二人がそのまま年長に持ち上がる。子どもは五十人の進級児に四人の新転入児を加えて五十四人。組織上は二クラスとなっているが、園生活では……。年長を、

一クラス（五十四人学級二人担任）にするか、  
二クラス（二十七人学級一人担任を二つ）にするか。

今年のこの目の前にいる子どもたちにとつて、どの

ようなクラス編成が質の高い保育を生み出すのか。子どもたちの年中の姿から考えてみた。

A子は隣りのクラスのB子と遊びたい気持ちがあるものの、クラスの壁を感じて遊ぼうとはしない。

担任はその壁を取っ払おうと、隣りのクラスと一緒に遊ぶ機会をこれでもかと増やしたが、その壁はコンクリート並み。

C男はクラスのリーダー的存在、人望も厚い。遊びをすすめるときも仲間一人ひとりの気持ちを感じながら、みんなをまとめる力がある。一方のクラスのリーダー的存在であるD男は自分が何事においても一番でありたい気持ちが強く、眉をひそめている友だちに気がついていない。D男にはC男の存在をもっと身近で感じてほしい。誰と誰が一緒になるとよいかを考えて全員を分けようとする適わぬ人が出てくる。

また自分の気持ちを声にするようになってきたE男。五十四人という大所帯ともなると、一人ひとり

の存在を全員が感じられるのか、一人ひとりの力が発揮されるのか。不安がよぎる。

保護者からは二人の先生の目から我が子を見てもらえると嬉しいという声が聞こえてきた。その気持ちもよくわかる。しかし、二クラスになったとしても年長は五十四人の集団で一つの活動に取り組みることが多くあることや、園内のさまざまな場所で遊びが展開していることを考えると、二クラスになったとしても二人の視線は必ず注がれるであろう。

全てを踏まえると、結局どちらとも決められないうが、一クラスとすれば、その中で一つに動くことも可能であるし、二つに分かれて動くことも可能なのではないか。編成はその時のねらいに応じて柔軟に行うことにした。

### 一クラスとしてのはじまり

新年度、年長児はかえで組一クラスとして発表された。昨年も担任として共に過ごしてきたが、

新しい環境に慣れるまでには時間を要する。保育者は神経を張り巡らせ、一人ひとりを感じとろうと必死であるが、五十四人みんなをみきれているかという不安に襲われる。それを補おうと保育後話し合いを密にするものの、日を重ねる毎に不安は増していく。

集まりの場面では一クラスの意識をつくっていくため、保育者の一方が主の立場になり、他方はその補佐をしながら、五十四人が一つの空間に集まる形をとった。紙芝居や歌等を楽しむときはよいが、保育者の話を聞く、子どもたちで話し合いをするには規模が大き過ぎる。それは子どもたちの姿を見れば明らかであった。どちらの保育室で集まってもよいことにして二つに分けてもよかったのだが、それでは集まりの様子を継続してみてもいかれない。

それぞれの保育者の持ち味を生かし、二人分以上の力が発揮されることをねらっていたが、これでは一人分の力も発揮できていないのではないか。

## 一クラスを二つにした効果

やはり一クラスを二つに分けようと考えた。八人グループを作り、それを二つの集団にして、そこに担任がそれぞれついて集まることにした。これが大成功であった。

「あつF君がいない！ 探してくるね」。グループ単位となって誰がいないか意識されるようになった。「みんな帰りの時間だよー」が「G君、集まるよ。待っているからね」と対個人にも声をかけるようになった。呼ばれたG君もその声の方が確実に温かく伝わり、戻ってきたときに自然と「お待たせ」の声がする。昨日休みだったH子に「風邪だったの？ 大丈夫？」と意外な人が心配している。周りの人を意識しながら生活する雰囲気の流れるようになってきた。保育者もまずは自分が担当である半分の幼児の責任をもつことで、一人ひとりの幼児についての育ちを丁寧と考えられるようになった。

## 二クラスの雰囲気もちながらの一クラス

一学期後半、目の前にいない子どもの動きも感じられるようになってきたことで五十四名全員をみていけるようになった。五歳児の保育においては、一見好きな遊びをしているように見えるが、ただ何となく過ごしていて、いまひとつ充実していないような状況に出会う。そのようなときオリンピックごっこ（六段の跳び箱や倒立前転、逆立ち歩き等）のよくな難しいことにチャレンジできる場や時間を、一人の保育者が腰を据えて付き合いながら保障していく。影絵あそびや映画館ごっこで使うOHP、人形劇やお店屋さんあそびで使う放送デッキ、これら本物の器具を自分たちで用意してより本物に近いものを創り上げていく楽しさを見出していけるように一人の保育者が見守りながら、子どもの出方に応じて環境構成していく。一人の保育者が間接的にじっくりとかかわることが大切であると感じる五歳児。二

人担任ということ、一人が一つの遊びに時間をかけてかかわりたいときは、他方の保育者が全体に意識をもって動くといったことが可能になった。

### 新たな二つの集団

集まりの場を二つにわけても一クラスという意識を持ち続けている子どもたち。遊びの中で新たな仲間関係が生まれた。

J男は友だちと遊びたい気持ちを上手く表せなかったが、心の通わせられるH男という友だちができた。J男にとってはH男と集まりの場が同じであるといのではないか。

M子とN子は常に二人でいることが多く、少し距離を置いたほうがよいのではないか。

P子は不安なことがあると年中からの担任にしがみついて口を閉ざすが、他方の担任の前では不安な気持ちは隠して自分の力で乗り越えようとする姿が出てきた。他方の担任側で集まりをする体験があつ

てもよいのでは。

そこで、今まで組んだことのない人同士で新たなグループを作り、メンバーを見ながら、担任との関係も検討して分け直した。今、ここにいる子どもに出会い、その実態に即してクラス編成を新たな形にしていく。

### 一クラスのさまざまな分け方

二学期はリレーが盛り上がり、それが運動会にもつながっていった。リレーでは今ある二つの集まりのメンバーで行うことも考えたが、子どもたちだけで相談するには人数が多過ぎる。また勝ち負け二つだけではなく一、二、三位まであった方が救われることもあるのではと三チームに分かれて集まるという編成も行った。水族館への園外保育もできるだけ一人ひとりがじっくりと見られるように三チームに分かれて動いた。園庭で行う火を使った活動（野菜スープ作り・たき火・焼き芋等）では四チームに分

かれて担当になる日をつくった。活動のねらいに応じて、集団の組み方も三つ四つに変えることで、適した規模の集団で一つひとつの活動に取り組めた。

### クラス編成とは

このように『クラス編成』について考えてきたつもりであったが、要は『ティーム保育』の在り方なのであろう。活動の内容や場にに応じて、クラスの枠を越えて行う保育が可能なのであれば、二クラスでもよかったかもしれない。ただ、この子どもたちにとってはクラス名を一つにしたことがプラスの効果を生んだように思う。保育者が我がクラスに縛られない、保護者はどちらの担任にも声をかけやすい、そして何よりも言葉へのこだわりが強くなっている年長児にとってはクラス名が一つであることがみんなで一つという感覚をつくってくれる。

年度初めに発表されるクラス編成。当然決まっ

いるかのように思われる事柄について、ちょっと立ち止まって考えてみる、このことは私自身が保育上大切にしていることの一つである。忙しいと感じているときこそ、忘れてはいけない。

つい先日、もちつききの白について話していたとき「どうして白に水じゃなくしてお湯を入れておくの？」と尋ねられた。熱湯消毒に加えて、水よりお湯の方が水をよく吸ってくれることを伝えたいのだが……子どもと一緒に改めて考えてみる私がいいた。

「んー、手と同じなのかしら」。お風呂で手が柔らかくなるのと同じように木もお湯の方が仲良しなのかもしれないという話になった。すると「じゃ、白は生きているのかな?」。頭の中にある情報をフル活用して、一つのことを深く真剣に考えている。毎年使われる白であり、白についての話は何度もしてきたが、初めての質問。たとえば、その質問の答えが



すぐに浮んできたとしても、それは横に置いておき、頭を真つ白いノートにして考えてみる。すると、全く同じ答えにはならない。根本は同じであったとしても、目の前の子どもとつくっていかうとす

ると、新しい形になっていくものである。日々新たな発見を見出している子どもたちから学び、新しい保育へとつなげていきたい。

(駒場幼稚園)

## 香りがつなぐ新たな出会い

宮崎 薫

梅に、沈丁花……街を歩いていると、どこからか漂ってくる花の香りは、春の訪れを知らせてくれます。その香りを、思いっきり吸い込むと、細胞のす

みずみまで目覚めていくような気持ちになります。子どもたちに向けての「香りの体験学習」に関わり、この春で五年目になります。見る・聴く・嗅